特集　集客観光施設向け果樹選定と利用法

1 アメニティとしての果樹の利用

はじめに

近年「アメニティ」という言葉をよく聞くようになってきました。「アメニティ」とはもともと生活環境の快適性を示す意味です。ここでは、果樹を身近な生活の中に取り入れ、実をつくるためだけでなく、花や紅葉も楽しめる空間を創出しようとする意味で用いています。

都会ではあまり見られなくなりましたが、カキ、イチジクなどの果樹類は、古くから家庭果樹として庭先や家の近くに植えられており、比較的身近な果樹といえます。これらはもっぱら果実を生産するためのもので、花や紅葉とかの景観形成を目的とした利用はほとんどされていませんでした。一方、園芸用の草花や花木は観賞用として庭、公園、街路等に利用されています。「アメニティ」としての果樹類では実だけでなく花や紅葉も活用するわけで、ある意味、欲張りなことかもしれません。

1 アメニティとしての果樹の利用場面

花も実もあり紅葉もある果樹類を利用する場面としては次のようなものが考えられます。

(1) 中山間地や都会における公園や街路樹

中山間地域における棚田や放棄園、あるいは都会における公園や街路樹等でかなり省力的に栽培し、主に景観の向上に利用。

図 「但馬長寿の郷」での果樹類の利用

(2) 観光果樹園や農業公園など各種観光施設

比較的、手間が掛けられる施設で花、紅葉だけでなく、果実を収穫し生果として、あるいはジャムなどの加工品として利用。

(3) ベランダ等狭い空間

あまり広い庭がとれないような都会でポットやプランター等を利用し、誰でも容易に栽培を楽しむ。

2 アメニティとしての利用を進めるには

果樹のアメニティとしての利用を進めるには、まず果樹類の花や紅葉の美しさについての評価を行うのはもちろんのことですが、現在多くの品種が良質の果実を生産することを目的に育成されてきた結果、全くの放任栽培は不可能に近いといえます。つまり、多くの品種では、人が手を加え栽培管理することを前提に育成された品種であり、放任すれば着果過多などによる樹勢の衰弱、あるいは病害虫の多発を招くことになります。一方、地域に自生する小果樹類や比較的野生に近い樹種では概して収量や果実品質で劣りますが、病害虫に強いものもみられます。

これらのことも含め、今後、果樹類を幅広く利用するには、実に多くの解決すべき課題がありますが、主なものとして次のようなものが挙げられます。①果樹類の花や紅葉の美しさの評価、②放任に近いような形での省力栽培に適した樹種(地域に自生する小果樹類も含む)や品種の選定、③誰でも取り組める簡易な栽培管理法(着果管理、整枝・せん定法、樹体のコンパクト化、病害虫防除など）の開発、④地域特産の小果樹類を含む果実の加工品や食材としての利用法の開発。

おわりに

将来、果樹類がより身近なものとなり、人々がその花や紅葉などの美しさを楽しみ、また果実を収穫し、それを味わえたときの喜びを通して、こころ豊かな生活をおくる一助になることを期待しています。

松浦　克彦（北部農技・農業部）